

「旧約聖書におけるイスラエル12部族の 歴史的変遷と陰影」～前編～¹⁾

宮 寄 薫

第1章 イスラエル12部族の全体像 -序論的考察-

1. はじめに

旧約聖書全体を通して「イスラエル12部族」は様々な形で言表される。神の契約の民であるイスラエルは12部族から成るという主張は旧約聖書に通底しており、イスラエル12部族は歴史的にも実態を持つ集団であることは確かである。

しかしながら、12部族を構成する個々の部族に関する旧約聖書の伝承や物語には多寡や濃淡がある。各部族への扱いは対等でなく評価も多様で変化がある。旧約聖書が内包する「イスラエル12部族」をめぐる多様性の背景には、歴史的背景や書かれた時代の政治的事情があろう。なおかつ、そうした背景や事情は相互作用的に働き、旧約聖書全体の特徴に何らかの影響を及ぼしていてもであろう。その中であって、旧約聖書に刻まれるイスラエル12部族についての言及は、おそらくそれぞれ異なる状況における記録や主張を反映しているはずである。したがって、従来読み過ごされたような箇所にも光を当て、12部族に関する描写や表現を丹念に探求・分析し、部族間に生じた歴史的背景や織り込まれた意図を解きほぐすことによって、12部族からなるイスラエルの民のありようを立体的に把握できるのではないかと考える。そうすることによって、あるいはそこから浮かび上がってくる神学的メッセージを得られ、ひいては旧約

聖書全体をよりよく理解することにも寄与できるのではないだろうか。

旧約聖書には各部族を平面的・水平的に描き、イスラエル民族の統合体としての「イスラエル12部族」の姿を映し出すテキストがある。²⁾ これらは神の契約の民イスラエル全体が一つであるという姿を宗教的・神学的に表現し主張するもので、神の契約相手である聖なる民イスラエルの構成部族の数は「12」であるという要素もここに含まれる。従来、「イスラエル12部族」の研究はそうしたテキストを主に対象としてきたと見られる。1950年代に流布した部族連合(M. ノートのアンフィクチオニー仮説)もこの捉え方によるものである。³⁾

他方、12部族を構成する個々の部族に関する些細なエピソードや、個別の人物の物語を生き生きと記す聖書テキストがある。個別の部族の状況や隠れた内部事情について、私的で裏話的な側面まで伝える。とりわけ旧約聖書の物語(ナラティブ)において、独特な起伏と展開、文学的技巧や表現を提示する。これらは、「イスラエル」を形成した諸部族の歴史や、部族間の関係の歴史の変遷の痕跡を記憶にとどめておこうとするものであろう。概してこれまでの研究では、統合体としての「イスラエル12部族」を対象とすることに主眼が置かれており、個別の部族に関する側面は、旧約各文書の注解書や釈義の範囲内で個々に検討されても、旧約聖書全体を通して総合的に論じられることはあまりなかったのではないか。筆者はこのような認識に立って、旧約聖書における「イスラエル12部族」のありように関心を持ち、イスラエル12部族に関して読み過ぎされがちな部分も含めて探求し、浮かび上がるものをつかんでみたいと考え、この研究に取り組み始めた。

研究の方法論としては文芸学的批評、修辞批判的方法が主軸となるが、ほかにも歴史批判的研究の成果、考古学的、人類学的知見も採り入れ、また地図や語源等を調べることに努めた。イスラエルおよびイスラエル12部族は歴史的な実態を持った存在だからである。

2. イスラエル12部族とは何か

「部族」という存在

「部族」tribeとは、存在する人間の集団を表すがその範囲は非常に複雑である。ヘブライ語ではおもにシュベト שֵׁבֶט や マッテ- מַטֵּה という語である。ミシュパ- מִשְׁפָּחָה と呼ばれる社会集団もあり、概ね「氏族」clanと訳される。旧約聖書では、イスラエルを構成する「部族」と「氏族」が混在する箇所は多く、「民族」と「部族」の区別が難しい箇所もある。ほかに、おそらく親族を意味する「父の家」ベト・アブ בֵּית־אָב という表現もある。それぞれの規模の順位や構成員については見解が異なるものの、旧約聖書における「部族」は、非常に複雑で曖昧さを含むという点では一致している。⁴⁾ イスラエルの宗教的部族社会としての実態は不確かであるが、イスラエルは12部族によって保たれる、という思想は旧約聖書に充満しているのは確かである。

そうであるなら12部族のそれぞれの成員はもとの同一性によるものでなく、起源の異なる様々な人々の集団であったが、共通の目的のために生成され、共存し、維持されて一つの全イスラエルであるように合わせられたものである、ということが本質的に言えるだろう。イスラエルが12部族の存在において実態を持つとは、おそらく各部族が領する土地と強く結びついているということではないか。したがってイスラエルの土地への固着という視点は非常に重要となる。

「イスラエル」という名

1895年に発見されたMerenptah Stele（メルネプタ又はメレンプタハ碑文）は、「イスラエル」と呼ばれた何らかの民族的存在が紀元前1200年の少し前にイスラエルに現存したという証拠史料であり、最初期のイスラエルの起源を示すものとして重要視される。「イスラエル」は、民族、王国の名であり、地名、人名も指す、広範囲な意味をもつ固有名詞である。前述のように、「イスラエル」という名称の歴史性は証明されたが、謎も多い。

旧約聖書において、イスラエルの名称に関わる特徴的な語りを含む創世記32

章を見ていきたい。

12部族の父祖であり族長であるヤコブが、イスラエルの名 **יִשְׂרָאֵל** を新しく授与されるさい、ベヌエルでの何者か(神?)との格闘の末、「あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ」(創32:29/聖書協会共同訳)⁵⁾ と言われる。前後の文脈では、実際ヤコブがその格闘に勝ったのかどうかは曖昧であるし、「人々」とは誰かも不明である。しかしこの記事から、「イスラエル」の名には「(ヤコブが) 神と闘う」・「神が(ヤコブと) 闘う」といった意味や原因があることが示唆される。なお、「闘う」と訳された **שרה** には第2の意味として、**rule** (支配する、治める: cf. **שרר** との関連から) も示唆され、⁶⁾ ここから「イスラエル」には「神が支配する」の意味も含意される。⁷⁾

この動詞 **שרה** の基本的な意味は、**persist** (=固執する、信じ続ける)、**exert oneself** (=努力する、尽力する)、**persevere** (=諦めずに耐える、頑張ってやり通す) である。⁸⁾ そう解釈するなら、ヤコブはこの格闘において、勝利したというより、「粘り抜いて放棄しなかった、手放さなかった、何かを主張し続けた」ので、結果として「負けなかった」というのが本意であろう。また、前置詞 **עם** の意味は、基本的には**with**であるので、その場合は、「ヤコブは、神と共に、また人々と共に、粘り強く耐えて、手放さない」というポジティブな意味となり、それが可能であるのが「イスラエル」の名にふさわしいあり方だと神(ここでは **אֱלֹהִים**) が認めたという話になる。

土地への固執という視点

もしそれが本来的な解釈であるなら、ヤコブが、その背後にいる神と人々の思いを共有しながら、耐え抜いて手放さなかったもの、あるいは自分の手で獲得し続け、自分のものであると信じて主張し続けなければならないとされているものとは何であろうか。創世記の文脈では、それは「神からの祝福を受けること」である(創32:27、30)。それは神学的に正しいが、より具体的な事柄として考えられるのは、「地」であろう。すなわち、この神が約束され、主の契約相手としての民を生かし続けるための場所=土地 **אֶרֶץ** **land**への固執、固守こそ「イスラエル」にとっての深層部に

における重要課題なのではないか。

そこで、この民に授けられる「地」を固守する元祖としてのヤコブが、「イスラエル」の名を与えられるのである。したがって、ヤコブから分かれ出た12人の息子がのちの「イスラエル12部族」の父祖として名を保ち、その子らが各部族に割り当てられた神の土地を固守し続けることが神の祝福の実現になる。旧約聖書において、おそらく古い伝承であるほど、人の名はその土地の名と深く結びついているという特徴もある。イスラエルにはイスラエル固有の土地があるという主張が——それは神のもとから来た祝福であるが——、12部族の族長（父祖）にあたるヤコブの別名としてここで明言されているのである。土地への固執と、そのための現実の様々な「格闘」をイスラエル12部族（とその子孫）は経験する。それらの人々の営為全般を含めての「イスラエル」、すなわち神の祝福と支配の下にある土地、およびそこに住み生きる人々が神の御意志に従って生きるありようの包括的な自己理解が「イスラエル」なのであると言えよう。

その意味では、12部族の中にあえて固有の土地を持たない一部族（＝レビ）を据えるということは、イスラエルの宗教的特殊性を存分に表すものであると言ってよいだろう。第2章以下は、各論に入り、主要な部族について焦点を当てていくが、最初にレビを取り上げることとする。

第2章 主の担い手、レビについて⁹⁾

イスラエル12部族の中で、最初にレビ族（レビ・レビ人）について論じる。イスラエルは神である「主」YHWHと結びついてこそ存在意義を維持してきた。主の律法と祭儀を専ら担い続けてきた「レビ」を抜きにしてイスラエルは存続しえなかったと考えられるからである。レビは、嗣業の土地を持たず、地理的集団としての実情が不明で、しばしば部族リストから外され、名称も複雑である。こうした不明瞭さの根源は、他部族同様かそれ以上に、イスラエルの歴史の中でたどられた複雑な経緯によるものと推測できる。

レビの名には「結びつく」という意味がある。¹⁰⁾ レビはレアから生まれたヤコブの息子として「イスラエル」に結びついて初めて意義ある位置をもつ存在であり、同時にレビの系譜は「主」に結びつく。レビは当初から、主の民イスラエルの中で主の御用をする特別な役割（職務）を担う者として自他共に認識されていたであろう。関連する創世記34章の記事と49章のヤコブの祝福は、レビ人固有の性質と主の担い手としての聖なる職務に言及する内容を含む。また、出エジプト記32章の出来事はレビ人の特質を示すとともに、モーセとの根源的な結びつきを語るものである。

一方、レビ人と祭司の関係は非常に複雑である。モーセの兄で祭司のアロンの唐突な登場後、アロンの家系がレビ族を治めると定められる。民数記では祭司職とレビ人は聖性と職務において明確に区別され、レビ内部にある二重構造も記される。およそ「レビ人」なる集団はモーセの権威との関連において威信と存在意義が保たれていたが、その後王権と結びついて権威を増した祭司集団との関係において「レビ人」の立場は低められたためであろう。しかし申命記では「レビ人祭司」の表現に象徴されるようにレビ人は祭司と同等の扱いを受ける。歴代誌ではレビ人は神殿に仕え、祭司と同じ聖性を持つ集団として描かれる。幕屋時代モーセに忠実であったレビ人を、イスラエルの中心聖所であるダビデーソロモンのエルサレムの神殿に忠実な奉仕者、また主の民「全イスラエル」の核として、歴代誌は位置付ける。歴代誌はもとより、旧約聖書の多くを書き記したのはレビ人であろう。

「レビ」および「レビ人」は、イスラエル12部族に内在し、歴史的な変化を受け止めながら、特別な主の担い手として働き一元的に存在した。嗣業の地はなく血縁地縁によらず、武力や財産も剥奪された代わりに、「主」を嗣業とする任務に献身した。モーセ以来、その時々の中核的存在と結びついて、変わらず「レビ」の名に立ち続け、主の民イスラエル内部に実在したのである。

第3章 ヨセフの部族について

1. マナセ／マキル 初期イスラエルの重要部族¹¹⁾

イスラエル12部族の中に正式には「ヨセフ部族」の名はない。代わりに「ヨセフの家」として、マナセ、エフライムを数える場合もある。地理的に「北方部族」の代表ともされるが、弟格のベニヤミンとの関わりも深く、ヨセフ族が意味する範囲は明快ではない。それだけ古くからイスラエルの歴史の根幹に関わる最重要な部族であったが、イスラエル王国時代前後からの歴史的な激動の影響を容赦なく受けた部族グループであったと見られる。歴史的には、ヨセフの長子とされるマナセがエフライムより歴史的に古く、おそらく「イスラエル」部族集団の形成の初期段階に関わる重要な部族である可能性が高い。

旧約最古の資料「デボラの歌」(士5)にマナセの名はなく、デボラの時代にマナセは一部族としては存在していなかったが、代わりにマキルがヨルダンの西側に定着しており、当時エフライムやベニヤミンと並ぶ部族／氏族だったと推測される。「マナセの半部族」とは、後に西から東に移住したマキルのことであると聖書(ヨシュ13:29-31)は明言しており、歴史的経過ないしマナセ人の圧迫により移住の上、マナセの名を帯びるようになったと考えられる。系図上、マキルはマナセの子、東のギルアド地方を取ったのでマキルはギルアドの父とされた。マナセの前身とも言えるマキルがおそらくヨセフの家の中核であることが示唆される。マキルは、ヨセフに重なり、マナセに連なる。そうであるからこそ、イスラエルは、(レビを抜いて)マナセとエフライムを改めて12部族に迎え直す手続きをとり(創48:8-20)、主なる神が与えた嗣業の地の恵みを十分に示そうとしたのだろう。

マナセは当初、非常に重要な位置を占めていたが、後に劣勢になる。マナセ領だった土地はオムリ政権以来サマリアとなり、アッシリアによる北王国イスラエルの滅亡と共に歴史の流れの中に埋もれていった。エジプトのMerenptah Steleに刻まれる「イスラエル」はなお謎に包まれているが、旧約聖書はエジ

プトとヨセフ（の家）との深い繋がりを記し、ヨセフがイスラエルの元祖であった可能性を示唆する。中でもマキルが最古のヨセフグループの名残として痕跡をとどめている。そのマキル―マナセの系譜とエフライムが共に、ヨセフの家＝イスラエルを継承し、初期イスラエルの形成に貢献し発展したのであろう。

2. イスラエルの政治的リーダー エフライム

おそらく王国時代前まではエフライム人（部族）がイスラエルの政治的指導者としての位置を占めたであろう。モーセから直接任命を受けたヨシュア、士師時代を経てシロ（エフライム領の聖所）の祭司エリの下から出たサムエルがそうである。モーセ（レビ族）からヨシュア、エリ（レビ族）からサムエルへと受け継がれる流れは、王制以前、世襲によらず、カリスマをもったエフライム人を中心として生じていったと考えられる。イスラエルの政治的中心地は、彼らが活躍したエフライムの地（シロ、ギルガル、シェケム）であった。次第にイスラエルの中心地は南下し、主導的人物はサウル（ベニヤミン族）からダビデへと移行する。その役割を最後の士師サムエルが果たし、王国時代への橋渡しをしたと言える。

カナン定着までの指導者 ヨシュア

ヨシュアは、若い時からモーセの従者（出17：9、33：11、民11：28、ヨシュ1：1）であり、モーセの生存中に、その後継者に任命された（民27：18、申31：7、14）人物である。彼が求めて相続地とされた（ヨシュ19：50）エフライムの山地のティムナト・ヘレスに葬られたこと（ヨシュ24：30、士2：8）、エフライム族の頭のヌンの子ホシエ（民13：8）がヨシュアと同定されていること（民13：16）から、エフライム人と見なされる。ヨシュア記3-4章の記述からは、ヨシュアこそ、主がモーセを通してイスラエルに授与された掟を納め、イスラエル12部族の前に主の現臨を表す「神の箱」の護衛者であり、全イスラエルをカナン定着まで守り導いたモーセの後継者であるとの主張が読み取

れる。モーセにも二人の息子がいたが、後を継いだのはエフライム人のヨシュアだった。これは、イスラエルの指導者は、血縁にはよらず、カリスマを受けた者（民11：28、27：18、34：9）によって継承されることを示す最初の例であると言えよう。しかし、ヨシュアの後を継ぐのも彼の子孫ではなかった。歴代誌はヨシュアをエフライム族の系図の最後に含めている（代上7：27）。¹²⁾

ヨシュアと対照的なのが、カナンの土地取得伝承において唐突に出現し、ヨシュアと並び称せられるユダ族のカレブである。民数記14：30、38および32：12、26における、カレブのヨシュアに対する優位性を顕著に主張する記述（おそらくユダ側の筆による）は、モーセの権威を継承したのがエフライム人ヨシュアであったという事実は一時的なものにすぎないと示すことによって、ダビデ以降のユダ部族の全イスラエルにおける首長的地位の正当性を強調しているのであろう。この点を裏付けるように、カレブは、ユダ族およびダビデと関係の深いヘブロン之地と関連づけられている（ヨシュ 14：6以下）。

王制定着までの指導者 サムエル

サムエルは、エフライムのラマ出身で、出生時から主に献げられたナジル人（サム上1：11）とされる。旧約聖書におけるサムエルの言及（140回）は、サムエル記上下と歴代誌上下に集約される。そのほか詩編99：6、エレミヤ書15：1でも言及され、そこではサムエルはモーセ、アロンと並ぶ宗教的な重要人物に位置付けられ、主の前に立って民の執り成しをする役割を担うと考えられている。サムエル自身には「何の不正も見出されなかった」（サム上12：5）とある通り、サムエルは主の顕現をつねに受けた預言者であり、主の命令に従った人物で、その尊厳は保たれている。

サムエルは、カナン定着後の士師時代から王国時代へとイスラエルが変化してゆく転換期に立てられた偉大な指導者であったと見られたことは間違い無い。

しかしながら、サムエルの重要性とイスラエル全体への影響力は、ある意味抑制されており、サムエルが活躍した時期に限定的であったように旧約聖書は

記しているように受け取れる。場合によってはサムエルが否定的に書かれる箇所もあるのも否めない。

サムエルは、幼少時よりエフライムのシロの神殿において祭司エリに仕え、主の顕現によってエリの家への託宣を聞き（サム上3）、その後おそらくエリの子の滅びを見届けた。サムエルは成長後も、シロにおいて預言者として活動をし、「ダンからベエル・シェバに至るまで」のイスラエルの人々の宗教的指導者であった（サム上3：19-4：1）。その後サムエルが再登場するのは、サムエル記上7章のことで、それはシロから一旦ペリシテ人に奪われた「神の箱」がキルヤト・エアリム¹³⁾に戻ってきてから20年後のこととされる。それによれば、サムエルの活動の場所が明らかに変化している。すなわち、ミツパを中心にベテル、ギルガルなどを巡回し、最後はラマに戻って生涯にわたってイスラエルを治めた、とある（サム上7：6-16）。これはサムエルの活動の中心地が、エフライム領にあたる北方のシロから南下して、エフライム領との境界付近から、主にベニヤミンの領地において展開されたことを示す。

このことは、エリの子の滅びののち、サムエルがエリの後継者のようになり、イスラエルの指導的立場に立ったことを確言するものだ。同時に、前述したように、イスラエルを主導する中心地が、それまでのエフライム（シロ）から、ベニヤミンの地に移ってきたことを示している。この地理的な重心の南下は、神の箱の移動とあいまって、イスラエルの指導者の出身地および出身部族の変遷を示唆するものであると考えられる。

・サムエルの曖昧な出自

その一方で、サムエル自身についての記述には曖昧な点があることにも触れておきたい。

一つの問題は、サムエルの出身地である。サムエルの父エルカナは、「エフライムの山地ラマタイム・ツォフィム」の人で、先祖はエフライム人（サム上1：1）と紹介されるが、すぐ後のサムエル記上1：19では、彼の一家の家は「ラマ」にあるとされている。これ以降、サムエルが帰る家は「ラマ」（サム上

2：11、7：17、8：4、15：34、16：13、19：18) にあり、サムエルが葬られたのもラマであった(サム上25：1、28：3) と、頻繁に「サムエルの家＝ラマ」と言及される。

しかし、ラマはベテル、ミツパより南に位置し、両者と同じようにベニヤミン領に属する土地である(ヨシュ 18：25)。したがってサムエル記上冒頭の「エフライム山地のラマタイム・ツォフィム」と同定することは困難となる。サムエルの一家がもともとベニヤミン領の「ラマ」にあったとすれば、サムエルはベニヤミン族である可能性も生じてこよう。仮に、のちに一家がラマに移住したのだとしても、少なくとも周囲のベニヤミン部族の民と密接な関わりがあったであろう。

サムエルの父エルカナの先祖はエフライム人ツフ(サム上1：1) だと明言されることから、サムエルもエフライム人であると一般に理解されるが、サムエルの出自はこのように曖昧に書かれている。¹⁴⁾ さらに、後代の歴代誌では、サムエルの一家は驚くことにレビ族に含められている。¹⁵⁾

・サムエルの限定的な役割

サムエルにおいても、エリ同様、自身の息子たちから後継者は続かなかった(サム上8：5)。

結局、サムエルの生涯を通じての役どころは、主がイスラエルの指導的地位をエリの家(エフライム／レビ族) から取り上げ、一時的にサムエルに預けたのち、サウル(ベニヤミン族) と王として立て、さらにふさわしい王ダビデ(ユダ族) へと移すという媒介的役割に徹したことであった。

サムエルは、ベニヤミンの王サウルを最初の王として立てたが、まもなくこれを棄却し、次にダビデに油を注いで王としたことで、最終的に(ユダ側に) 中立的～好意的な立場を与えられている。

王権について、サムエル自身は自分の息子の件には触れず、民が王を要求することそのものが主に対する悪だと考え、その考えは内心変わらなかったようである(サム上8：6、12：17-20)。

そんなサムエルの思いは前面に出ることはない。主が御心に敵わなかったサウル王を退けた時、サムエルは非常に悲しむが、再起してダビデを見出し、ダビデに油を注いだ（サム上16）。他方、主から見放されたサウルは、霊媒によってサムエルを呼び出し、伺いを立てた（サム上28）。サウルは自ら禁じた行為を行い、サムエルから恐ろしい言葉を告げられたのちに戦死してしまう。

・サウルとの関係の変化

ここでエフライム（ヨセフの家）とベニヤミンの関係性の変化についても触れておきたい。元来緊密であったと考えられる両者の関係は次第に変貌していく。どの時点でベニヤミンと、ヨセフの家を代表するエフライムの部族的な関係が逆転あるいは決裂するのかが明確ではないが、旧約テキストにおけるサムエルとサウルの関係の破綻がこの点について暗示的であると考えられる。

すなわち、「サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルに会うことはなかった。サムエルはサウルのことと悲しみ、主はサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた」（サム上15：35）とある。

また、それに先行するサムエル記上15：11でも「サムエルは深く心を痛め、夜通し主に叫び求めた」とある。ここでは、罪のゆえに主に捨てられるサウルを拒絶しながらも、内心は深く悲嘆にくれるサムエルの心情が鮮明に描かれている。サムエルは、サウルのことを死ぬ日まで気にかけて、サウルの方も、サムエルの死後も霊媒によって彼を呼び寄せるほどに内心サムエルを信頼しており、彼に拒絶されたことを案じていたのであった。このような心情描写は、サムエル（エフライム）とサウル（ベニヤミン）の元来からの密接なる関係を抜きにしては説明できないであろう。

これと比較すると、サムエルとダビデの関係は非常に希薄である。心情的な接点はほとんど見られない。ダビデはサウル王からの逃亡中、一度だけサムエルのもとに身を寄せサウルの仕打ちを告げた（サム上19：18以下）のちには、一切サムエルを頼ることはなかったようである。サムエルの死（サム上25：1）に際しても、逃亡中のダビデが率先してサムエルのために何らかの行動をした

とは書かれない。サムエルとサウルの間の濃厚で複雑な関係性に、ダビデ（ユダ族）は踏み込んでいない、という印象を読者は与えられるのである。

ユダ側から見れば、サムエルが北方部族に属しエフライムの祭司エリの家に住んでいたことと、イスラエルの王制導入には終始懐疑的であったという事情は、あまり歓迎されないことであったのではないか。そのサムエルよりは、ダビデの王権に対する正当性や、その継続の永遠性を強く語る宮廷預言者ナタンの存在の方が、大きくクローズアップされることになるのである。

主の民イスラエルの指導的存在は、主の顕現とイスラエル12部族のアイデンティティーを象徴する「神の箱」の移動とともに、モーセから、エフライム（ヨシュア、シロ→サムエル）を経て、最終的にエルサレムに運び上げるダビデの元へと移ってゆく。彼らに伴う預言者もサムエルからナタンへと変遷するのを見るのである。裏返せば、イスラエル諸部族内部のパワーバランスの変遷は、「神の箱」の移動に伴う護り人の入れ替わりに反映されていると見られる。

その過程においてユダ族の英雄（ヨシュアと同世代のカレブ、最初の士師オトニエル）らが、他の部族には見られない子孫と土地の継承の言及をもって突出して現れるのは、のちに台頭するダビデの家およびユダ族の首位主張の前触れであったと受け取れるのである。

第4章 ダンおよびマイナー諸部族について

1. ダンについて¹⁶⁾

この章で取り上げるダンは、主要でないマイナー部族の代表であるが、謎めいており他部族にない特殊性がある。¹⁷⁾ もともとダン族は古くから祭儀と関わりがあり、ユダに並ぶ勢力もある主要な部族であったことを旧約聖書は証言している。しかし、ダンへの評価はやがて下降する。

ダンには「裁く」の意味があり¹⁸⁾、ダン族は元来神的審判の担い手として特別な位置にあったであろう。「ダン」は、かつて主のような裁き手、祭儀と結びついた聖なる部族であり、ユダ族に近く位置し、ユダに次ぐ大きな規模¹⁹⁾を

持つメジャーな部族として位置付けられていたようである。

士師記17-18章の記事は、複雑で批判的な要素を含むが、ダンの最北の土地征服に言及するとともに、ダン族に固有の伝承とイスラエルの初期の祭儀の様子を記録し伝える。その中でダン族はエフライムの山地のミカの個人的な神殿祭儀の要素を取り去った。しかし、おそらく北王国ヤロブアム王への批判（ベテルとダンでの偶像礼拝）から、ダンの評価は急激に貶められたとみられる。

ダンは、嗣業の土地、パレスチナの「南」の定住に困難を抱えていたようである。その点を発端として、士師記17-18章に、北方のライシュ／ダンという土地への移住と、そのさいにエフライムの山地でのミカの家のヤハウエ祭儀がそのままダンに移動したという大きな二つの動きが記される。それは、ダンがユダ（南）を離れて、エフライム（北）へと政治的・祭儀的に移ったということかもしれない。

歴史的には、ダン族の北への移動はなかったのかもしれない、ただヤロブアムが興した「ベテルとダン」での聖所の祭儀のありかたが断罪される時、同じ地名に絡めて士師記18章においてダン族との結びつきが語られるようになったのかもしれない。聖書はそのあたりの事情を黙して語らない。そのためダンへの評価も曖昧にされる。謎に包まれたまま、ダン族は無言で消息を絶ち、総じてネガティブな印象を残す。歴代誌の系図にダン族は記されず、ヨハネ黙示録にもダンの名は登場しない。ダンは、イスラエル12部族の位置をひそかに外されるのである。

2. 士師記17-18章の意義

ダンは歴史的には、他民族からだけでなく、おそらくイスラエル内部のエフライムやユダからも圧迫を受けていたとみられるが、元来民を裁く特別な役割を担っていたとみなされるこの部族についての証言を含む物語が、士師記17-18章において、おそらくダン族内部の伝承に基づいて構成され記録されたと考ええる。

このように、もともと高位であったダンは極端に下降する運命を与えられ

た。それは旧約聖書における隠された形での部族間の対立また神学的立場の違いの反映であろう。とはいえ、士師記17-18章は、北イスラエルの伝統的な祭儀のありようを伝える示唆に富む記録でもある。

その祭儀の特徴は、神々の像、エフォド、テラフィム、託宣などであり、北王国（ラケルグループ）に関係する。南ユダの立場からは批判的であろうが、カナン文化宗教が根強かった北イスラエルで、古代オリエントの風習やカナン主義と接近しながらも、ヤハウェ宗教を根付かせた過程である見ることができる。最初の主の民、出エジプトの民のように、はじめから律法の定め通りに振る舞えなかった祭儀における失敗を繰り返しながら、イスラエルは生き残っていったのだ。

ここに、過去の失敗を、批判としてではなく、教訓として後世に伝えようとしている著者（＝神）が読者と共にいることを知る。卓越した視点をもつこの著者は、その祭具の形式や祭司の資格などを問題にし、それらに頼ったり反対に批判したりする人間的なあり方を遠くから眺め、祭儀そのものや祭司の意味を深く問うているようにも思われる。ダンは、イスラエル12部族の中で、イスラエルのために、そのようなアンビバレントな役割を担わされたと言えよう。

3. その他のマイナー諸部族について

ここでは、本研究で特に章立てをしていない諸部族の消息に触れておくことにする。

いわゆるマイナー諸部族の状況を知るすべは、聖書テキストそのものにある。12部族の序列に関わるヤコブの12人の息子の誕生物語（創29：31-30：24、35：16-18）、諸部族に割り当てられた嗣業の地（ヨシュ13-19ほか）およびその他の個別の記述を手がかりに論じていく。

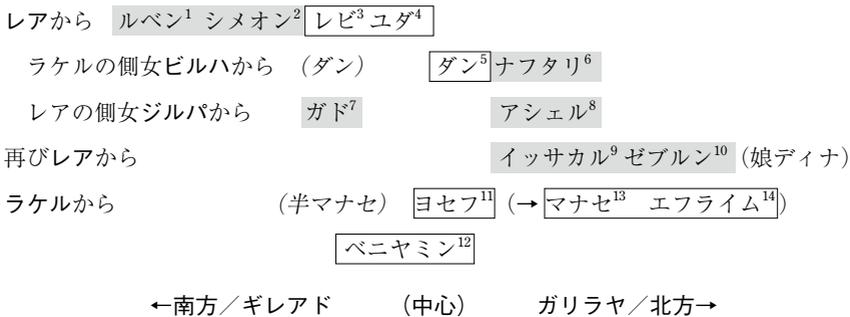
総じて、創世記のヤコブの息子たちの誕生物語は、中心でない周辺の土地（ギレアド、ネゲブ、ガリラヤ地方）を与えられた諸部族の歴史的事情と深く関連していることは明らかである。

まず興味深いのは、申命記27：11-14にあるモーセの命令により12部族の民

が二分される記述である。民を祝福するためゲリジム山側に立つのは、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ヨセフ、ベニヤミン。民を呪うためにエバル山側に立つのは、ルベン、ガド、アシェル、ゼブルン、ダン、ナフタリと命ぜられた。前者にはユダ、レビ、ヨセフ、ベニヤミンの主要部族にユダと近いシメオン、レビが加えられてポジティブに扱われ、後者のダンを含むそれ以外の非主要部族との区別を明白に示しているのである。

12部族の相関図

創世記の誕生物語では、各部族の序列や扱いは上述の申命記の区別と若干異なる。ヤコブとの関係における母と出生順（右上番号）は以下の通り。



上記のように、息子たちの誕生の図式は、2人×6組（ないし7組）のペアとみなすことができる。なおかつ、本論で取り上げる□で囲んだ主要部族を中心に、網掛けで示したマイナー部族を左右に振り分けると、ちょうど左側は南方またはヨルダン川東岸のギレアド地方の諸部族、右側は北方またはガリラヤ地方の諸部族となり、中央を取り囲むように配置されているのが見て取れる。創世記の誕生物語は、各部族の地理的事情とその後の消息を反映した相関図的なものだと言える。

側女を母とするダン、ナフタリおよびガド、アシエルの4人は同列で下位に

置かれる。

・ダンとナフタリ（母：ビルハ）

ダンは、前述の通り本来の主要な地位から急激に下降する運命をたどった。それが誕生物語において、ラケル系の第一子であるが、母は側女という位置付けを与えられた理由であろう。

ナフタリ²⁰⁾は、地理的にはガリラヤ湖の西側に位置し、北端のダンの地と隣接する。ナフタリを含む北方の住人はその後アッシリアに北イスラエル王国が滅ぼされる際、ニネベの捕囚となったとみられる。外国人の移住や混交も行われ「ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けた」（イザ8：23）ゆえ、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれるが、新約の時代において実現する栄光を受ける。

・イッサカルとゼブルン（母：レア）

レアから生まれたとされるこの2部族もガリラヤ地方の部族である。女預言者（指導者）デボラはイッサカル²¹⁾族とみられ（士5：15）、また、士師トラがイッサカル族である（士10：1）。

また、イッサカル族のバシヤは、ヤロブアム（エフライム人）の子ナダブ王に謀反を起こして北イスラエルの王となり24年間統治、その息子エラも2年間王位についた（王上15：25-16：8）。バシヤはヤロブアム家を滅ぼしたのに、結局彼の罪を継承したとしてネガティブに書かれている（王上15：34、16：7）。概して北イスラエル王国の罪の元凶はヤロブアム王の犯した罪（王上12：25以下、13：33-34）に集約されるが、バシヤも「ヤロブアムを討つため」（王上16：7）に、主の怒りを招く手の業と行つたと断罪されるのである。このように、イッサカル族からの王が二代続いたことが、ポジティブな評価を受けていないことはかえって注目に値する。ただ、申命記27章で、イッサカルだけがマイナー部族の中で唯一ゲリジム山の祝福側に置かれた。

ゼブルン²²⁾について、この部族を代表する人物としては、士師エロン（士12：11）および、ゼブルンの領地ガト・ヘフェルの出身の預言者ヨナ（王下

14：25、ヨシュ 19：13) が挙げられる。

・ガドとアシェル (母：ジルバ)

アシェル²³⁾族は、カルメル山の北に広がる地中海に面した肥沃な地を与えられた部族で、聖書では最も言及が少ない部族である。割り当て地は、ティルス、シドン、アッコ(ウマ)などを含むとされる(ヨシュ 19：24以下)が、これら海沿いのカナン²⁴⁾の強固な町にはフェニキア人が住んでおり、アシェル族が占領できたということはおそらくなかったであろう(cf. 士1：31-32)。これらは交易の場であり(cf. イザ23)、ソロモン王の時代、神殿建設にあたりティルスの王ヒラムと条約を結び友好関係を築いた(王上5：15以下)時期もあった。しかしアシェル族はカナンの先住民の勢力につねに押されていたはずで、王国分裂以後はさらに力を失い、やがてアッシリア帝国に呑みこまれていったとみられる。アシェルはダンと同様、海沿いの開けた地を割り当てられたゆえの困難を強いられた。²⁴⁾

他方、ガド²⁵⁾は、死海とガリラヤ湖を南北に結ぶヨルダン川の東側全域に嗣業の地を割り当てられた部族である。ガドの領地の南方には、ルベン族の土地がある。北側はギルアド地方であるが、ガドとギルアドはしばしば重ねられる(ヨシュ 13：25、士5：17)。

ヨルダン川東岸の地域は、モーセによってまずルベン、ガド、半マナセに与えられたとされる(ヨシュ 13)が、この地域一帯は早くからアンモン人やモアブ人からの圧迫にさらされ続けた。その様子はギルアド人の士師ヤイルや特にエフタ(士11)の経験として記されている。

ヨルダン川東部はもともと、アンモン人、モアブ人、エドム人の居住地であった。これらセム系民族は、創世記ではイスラエルの親戚関係とされ、イスラエルに従属した時期もあった。そうした関係のあるギルアド地方・東岸地域を与えられた半マナセ、ガド、ルベンは、歴史的に古い部族・氏族であろう。いずれも各母親の第一子とされる所以はそこにある。

しかし、この東岸地域の歴史的に不安定な事情のためにこれらの部族も栄え

ることはなかった。アッシリア帝国に占領された後、再びアンモン人やモアブ人が占拠する地になった。不利な地理的要因ゆえに、ヨルダン川東岸地域は、イスラエルの政治的中心であったことは一度もない。これらの部族はヨルダン西側に本拠地を置くイスラエルの中心勢力（エルサレム、サマリア）の政治的影響下にも置かれていたのである。

・ルベンとシメオン（母：レア）

レアがヤコブに産んだ長子ルベンと第二子のシメオンについては、第2章、第6章などでレビやユダとの関係において触れており、ここでは簡単に述べるにとどめる。

ルベン רַבֵּן は“behold a son!”（ご覧ください、息子です!）との名の由来のように、レアが誇らしげに生んだヤコブの長子である（創29:32）。もともとの地位は高かったが、ルベンに関する否定的なエピソードがあり（創35:22、49:3-4）、実質的な長子の権利を失っていく。地理的にはルベン族は、ガド族領地の南、死海の北東部に広がる地域を与えられた。士師記5章のデボラの歌に、家畜の中に止まって出陣しないルベンの様子が言及される（士5:16、17）ことから、古くからイスラエルに存在したが、好戦的でなかった部族であることが窺われる。ルベン族出身の士師、指導者および特定の個人についての記事はなく、ルベン族は早いうちに勢力を失っただろう。しかし、ルベンの歴史の古さと、死海をはさんでユダと隣接する地理的要因が重要視された。それゆえ、ルベンのヤコブの長子としての名は保たれ、ユダと同じくレアの系譜とされたのであろう。

同じように第二の息子シメオンもユダとの関係が深い部族と言える。シメオン שִׁמְעוֹן ($\sqrt{\text{שמע}} = \text{to hear}$) は、早い段階でユダに吸収された部族と見られる。ヨシヤ記19:1-9によれば、シメオン族の相続地は、ベエル・シェバ、ホルマを含むネゲブ地方で、南方ユダの相続地の間にある。ユダの割り当て地が大きすぎたため、シメオンの一族が共に受け継いだのだとされる。シメオンとレビは、ユダの兄として位置付けられており、ユダよりは歴史は古いが、実質的に固有の領地がない、あるいは持たなくなったベアと言える。シメオン族出身の個人は、特に見当たらない。

士師記5章のデボラの歌に名が記されないのは、シメオン、レビ、ユダである。その理由については議論がある。これらの部族は当時、存在していなかったか、「イスラエル」に属していなかったかのどちらかである。いずれにせよ、レア系のルベン、シメオン、レビの位置付けは、ユダとの関係の近さによることは確かであろう。

(みやざき・かおる)

注

- 1) 本稿は、2023年6月に学位（乙）請求論文として東京神学大学に提出した同タイトルの論文の前半部分（第1~4章）をまとめたものである。論文は、同年9月の東京神学大学論文審査委員会、および12月の東京神学大学大学院神学研究科委員会による論文審査を経て合格が承認された。本稿は、誌面の都合上、同論文全体を大幅に縮小または要約した形での掲載であることをお断りしておく。各章の内容において、すでに掲載された学術論文と重複するものについては脚注に示したのでご参照いただければ幸いである。なお、後半部分については後日掲載される予定である。
- 2) いわゆる部族表や系図、12部族に割り当てた当番表など。また12部族をひとまとまりの団体として描き、その中に指導的存在を立てたりする話なども含まれる。
- 3) 1930年に出されたM. ノートの「アンフィクチオニー仮説」は、当時一世を風靡し、旧約研究者の間で広く受容されたのち、批判され、ほぼ退けられている。本論ではこの仮説の内容や議論の詳細は触れないが、古代ギリシアおよびイタリアでの12（もしくは6）数の成員による諸同盟の考察から、アンフィクチオニーなる外国起源の組織形態を、12部族連合からなるイスラエルの宗教組織の初期段階の基盤に類比させたノート仮説は1950年代に広く流布した。しかしもはや全面的に支持されていないのは、実際にそのような組織が存在したという証拠の資料が聖書内にも聖書外にもない点が決定的であった。興味深いのは、この仮説の根拠にもされた旧約聖書テキストは主に、ヨシヤ記24章、士師記19-21章および部族表であったことである。それらは、前述したように統合されたイスラエルを総合的に図表的に提示しているテキストであり、少なくとも

宗教的民族イスラエルの形成初期段階の出来事を史実として描いたものではなからう。とくにカナン入植から士師の時代の実相を伝えている可能性は極めて低い。それらのテキストには、実現には至らなかった理念、理想形としての、宗教的に一つに連合したイスラエル12部族のありようが掲げられていると受け取るのが妥当であると思われる。

- 4) C.H.J. de Geus, *The Tribes of Israel: An Investigation into Some of the Presuppositions of Martin Noth's Amphictyony Hypothesis*, Van Gorcum, 1976, pp.111-119. John W. Rogerson, *Anthropology and the Old Testament*, Growing Points in Theology, Blackwell, 1978, pp.86-89.
- 5) Gen. 32:29: וַיֹּאמֶר לֹא יֵעָקֹב יִאֲמַר עוֹד שָׁמַד כִּי אִם יִשְׂרָאֵל בְּיַשְׁרֵיָהּ עַם-אֱלֹהִים וְעַם-אֲנָשִׁים וְתוֹכְלֵ: 新共同訳では、下線部は「神と人と闘って勝ったからだ」。ホセア書12：4、5も参照。
- 6) *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon (BDB)* , p. 976.
- 7) *Ēl persisteth, persevereth, contend* (or jussive *Let Ēl persist / contend*) . -*BDB*, p.975.
- 8) *ibid.*
- 9) レビについてのより詳しい論述は、拙論「旧約聖書における『レビ』および『レビ人』について——主の担い手としての存在と働き」、『神学』83号、2021年、191-224頁を参照されたい。本稿は、紙面の制約上、論文の第2章全体の要約の掲載にとどめた。
- 10) レビ לֵוִי [levi] の名の起源については不確定的で諸説あるようだが、創世記31：34では「今度こそ、夫は私に固く結び付けてくれるでしょう」と、「結びつく」という意味の לָחַץ に帰されている。「レビ」の名を旧約聖書が לֵוִי と関連づけた意味は、最重視されるべきであろう。
- 11) この項目で述べる内容については、拙論「イスラエル12部族におけるマナセの位置」、『伝道と神学』No. 9、東京神学大学総合研究所、2019年、85-100頁も参照されたい。
- 12) ヨシュアの子孫については言及がない。任職や祭儀、土地割当て等の際にヨシュアと共にアロンの子の祭司エルアザルが登場する（民27：18以下、32：26、ヨシュ21：1）が、エルアザルの系図は後世に続いている（代上5：27以下）ことと対照的である。
- 13) ユダ領とベニヤミン領の境界線付近に位置するキルヤト・エアリムは、かつてバアラ／バアラトと呼ばれ、ユダ領からベニヤミン領に移ったとされる（ヨシュ15：9、60、士18：12→ヨシュ18：14、28；cf. 代上13：6）。エルサレムの西側

12-3 kmにある地。

- 14) もともとエフライムとベニヤミンには歴史的な緊密性があるとみられる（本論第5章のベニヤミンについての論考で詳述）。これは創世記のヨセフ物語で、ヨセフとベニヤミンがラケルを母とする兄弟とされることにも関連する。
- 15) 歴代誌上6：12-13、17-20。
- 16) ダンについての論述は、拙論「イスラエル12部族をめぐる考察——ダンはどこへ行った？」、『伝道と神学』No. 7、東京神学大学総合研究所、2017年、115-138頁を参照されたい。
- 17) ダンは、第一に族長ヤコブの息子として、第二にイスラエル12部族のうちのダンの部族（氏族）として、第三に「町」の名として登場する。この3つの側面を備えている部族は、12部族中ダン以外にはない。
- 18) ダンの名の由来（創30：6）とされるヘブライ語動詞「ディン」דָּן (=judge, vindicate) は旧約聖書に24回の用例があるうち、17回は主／神が主語である。「主が民を裁く」との意味合いの名をいただいたダン דָּן は、そもそも神との関係が深かったことが想定される。創世記49：16のダンへの辞は、Bartuschによれば、「主がイスラエル部族を裁くように、ダンもイスラエルを裁くだろう」との解釈が可能である。Mark W. Bartusch, *Understanding Dan: An Exegetical Study of a Biblical Dan, Tribe and Ancestor*, JSOT Sup 379, Sheffield: Sheffield Academic, 2003, pp.34-39.
- 19) 民数記2章、26章における人口調査（各部隊の規模）では、ダンは12部族中ユダに次いで2番目に大きい。
- 20) ナフタリ נַפְתָּלִי の名には「わが闘い」の意味があり、デボラの戦いに参加し（士5：18）、ギデオンの呼びかけにもゼブルン、アシェルと共に合流し（士6：35）、ミデヤン人の追撃に加わった（士7：23以下）。ナフタリ族の母、ティルス人の父を持つヒラム（王上7：13以下）がソロモン神殿の備品制作を担当した。その他、ナフタリについて言及は多くないが、旧約外典「トビト記」のトビトはナフタリ族出身とされる。
- 21) イッサカル יִשָּׂכָר (√שָׂכַר : to hire) の名には「彼は報いを得る」との意味がある。
- 22) ゼブルン זְבוּלֹן または זָלְבוֹן : √זָבַל : to honour) の名は、「尊敬を受ける」といった意味を帯びる。
- 23) アシェル אָשֶׁר (√אָשַׁר : to go straight) の名には、「まっすぐ歩む、祝された、幸いな者」といった意味がある。

「旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の歴史の変遷と陰影」～前編～

- 24) なお新約聖書ではアシェル族の女預言者アンナが登場し、神殿において老シメオンと共に幼子イエスに会えたという幸いが記されている（ルカ2：36）。
- 25) ガド גַּד の名の由来は、おそらく「幸運」（גַּד）である。